

解放への一歩

〈筑紫野市人権尊重のまちづくりスローガン〉

自分が人からされたり 言われたりしていやなことは
自分は 人にしない 言わない

第49集

筑紫野市

写真：三日市公園



人は「ことば」によって 変わる

あのばあちゃんは いつも涙声で言った

「差別されて腹が立ってもぜったいに手を出したらいかん。

言葉で言いなさい」と

怒り 悲しみ 恨み くやしき 不条理 矛盾 いらだち

これらすべての義憤を ことばに変えて 相手に伝えなさい

だから「教育がいる」 「勉強しなさい」と

「ことばが大切」と

「言葉の暴力」に抗いつづけた人たちは 百年前に ことばを遺した

「人間を[※]勦（いたわ）るか^の如き運動は かえって多くの兄弟を墮落させた

ことを想えば 此際吾等の中（うち）より 人間を尊敬する事によって

自ら解放せんとする者の集団運動を起こせるは 寧ろ必然である」と

「人間を尊敬する」という言葉は 百年の時空を超えた

尊敬するべきは まずは自分自身なのだ

自分を大切にできずして 他者を大切にできようものかと

自他を尊敬することによって 差別なき平和の実現をと

他者を尊敬することによって 戦争なき世界の実現をと

百年の積日を経て 人の世に熱と 人間に光を求めた「ことば」は

いまを生きる わたしたちに探し求めよと

「人を大切にできる本物のことば」をと

「人を大切にする七色のことば」をと

※「勦（いたわ）る」…ぬすむ、かすめとる、ほろぼす、断つ、ころすなどの意





水平社博物館（奈良県御所市）

奈良へ

「そつだ。奈良に行こう」
そう思ったとたん、私は、奈良行きチケットをインターネットで購入していました。今年、水平社創立大会宣言が出されて100年です。水平社博物館がリニューアルオープンすることを知らしました。

へと向かいました。

「明るく」

展示室に入り、まず驚きました。とにかく明るい。白が印象的でした。以前の重厚感があり、身が引き締まる感じがする展示室とは違うものでした。

最初のコーナーで再び驚きました。今までより文字の数が少ない。そして書かれている内容が分かりやすい。人の想いは永遠で不滅なんだと訴える「鬼滅の刃」。人のつながりや世界をひとつなぎにすることの大切さを訴える「ワンピース」。多様性を訴えるミュージシャン「ブルーハーツ」の曲の歌詞。権利のために立ち上げられ、あきらめるなと訴える「ボブ・マーリー」の曲の歌詞紹介等々。

分かりやすい理由は、水平社の伝えたいことと重なる展示にあると気がつきました。さまざまな展示は、世代や時代を超え、見学する人にとって身近なものとして、自分と重ねて考えることができる内容だったのです。

他にも、タッチパネルや映像コーナー等があり、そのどれもが興味深く学ぶことができるものでした。

展示室を出た時には、何か熱いものがわきあがっている自分がいきました。水平社が考えていた差別のない世の中の

水平社と水平社博物館

全国水平社は、身分制度がなくなってからも差別に苦しんでいた人々が1922年3月に立ち上げ、差別をなくす運動を繰り広げていきました。

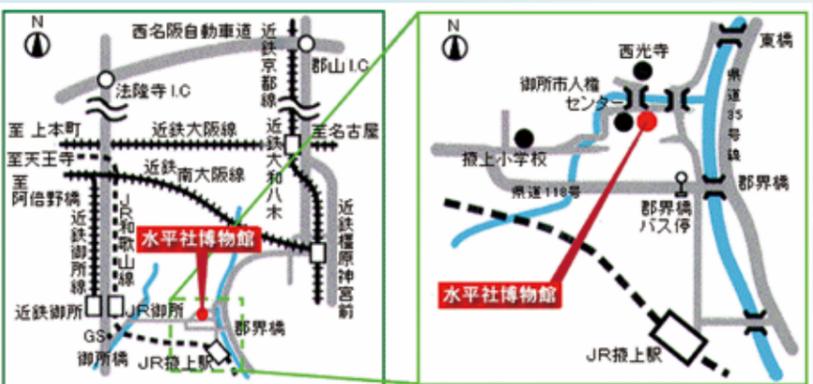
水平社博物館は、水平社運動のあゆみや、差別に立ち向かってきた先人たちの精神を伝えるため、水平社発祥の地である奈良に、水平社歴史館（1999年水平社博物館と改称）として、1998年5月に開館しました。

久しぶりに訪れる水平社発祥の地。どのようにリニューアルされたのだろうと期待に胸をおどらせ、水平社博物館

実現。そのために、**人間を尊敬することによってみんなで差別を克服していこう**という理念。それは、まさしく多様性が求められる現代においても通じるものであり、自分ができることからもう一度進めてみようという想いに立たせるものでした。

水平社博物館は、「何度でも見学したい。また行ってみたい」と思う所でした。あちこちにちりばめられた水平社の考え方や想い、それは、子どもから大人まで水平社の熱を感じることができ

るものでした。また、人権問題を明るく考え、課題と向き合い正しく考えることが大切であることを実感できる所でした。



「水平社博物館」行程図

「人間性の原理に覚醒し人類最高の完成に向かって突進す」という水平社ができた時の方針は、誰一人取り残されることなく、地球上のすべての人が豊かで幸せに暮らせる社会の実現に通ずるものであると改めて思いました。そして、**自身の存在に誇りをもち、人間を冒瀆してはならぬ**という言葉は、まずは、自分自身を大切にすることであり、相手を尊敬することが一人ひとりを大切にすることにつながるということを感じ取らせるものでした。

人間関係が希薄となったと言われる現代。そんな今だからこそ、「人間が相互に尊重される社会をと共に築いていこう」とさまざまな資料で訴える水平社博物館は、今の自分にとって、できることは何かを振り返らせるものとなりました。

差別がある社会の仕組みを変えていくために、私はまず自分自身を好きになろう。そして、身近な家族や子どもたち一人ひとりに「尊敬する言葉」をかけていこう。そうすることで、私の内なる「水平社宣言」が始まるような気がするのです。

福岡に戻って

福岡に戻った私は、もう一度「水平社創立大会宣言文」を読み返すこととしました。

人の世に熱あれ、人間に光あれ

みんなでつくる「人権の新しい時代」

同和地区出身の記者として

ある新聞の特集企画に、「人権新時代」という記事があります。その中の一つに、同和地区に生まれた28歳の記者が実名で書いた記事がありました。

8回にわたる連載記事の中には、同和地区に生まれたことを意識した小学生時代から、差別的な発言を見聞きするたびに、焦りや恐怖を感じ続けていたことが書かれています。

また、家族や友人、小学生の頃に参加していた学習会の指導者や差別と闘う活動をしている方へのインタビューを行っている中で、「記者として自分に果たすべき役割があるのではないか」という考えをもつようになっていったことが丁寧に書かれています。

心に残ったこと

この連載記事を読んで、私の心の中に一番強く残ったものが、記者と母親のやりとりの部分でした。

記者が自分のルーツを明かして記事を書くことを伝えると、母親は複雑な心境を次のように語ります。

「書くことで差別のターゲットになるのではないかという

す。空欄が埋まったのは前日の夕方、悩める時間をいっぱいに使って書き上げたつもりです。

キーワードは「みんな」です。部落問題以外にも、生きづらさを感じている人はすぐそばにいます。もしかすると自分の大切な人なのかもしれません。人権問題という言葉だけを聞くと堅苦しくも思える問題はみんな考えて、取り組んでいくべきなのでしょう。

「新しい時代」という高いハードルを読者に求めてしまいました。きれいごとを書いたつもりもありません。誰にも言えない生きづらさをくみ取り、胸の奥に押し込んだ切実な願いに応えられる能力が人間には備わっているはずですよ。

私がすることはこれからも変わりません。応えてくれる読者がいる限り、さまざまな人権問題を伝えていきます。

わたしたちができること

差別は私たちの身近にあります。だからこそ、相手の立場や気持ちを考えたり、自分のこととして考えたりすることが大切であることを私は今回の経験を通して気づくことができました。同じように新聞の特集を読んだ同僚も、さまざまなことを考えていました。

不安がある。差別と向き合い、問題を伝える大切さは分かるが、自分には人前で差別がいけないと言うことはできない。子どもには差別と関係ない場所で平穏な暮らしをしてほしい」

この言葉の背景には、母親自身が今まで味わってきたつらい差別体験があると思います。

本心では「差別をなくしたい」と考えているにもかかわらず、差別の厳しさを知っているが故に「そっとしておいてほしい」と言わせるものが、差別の根深さだと思っています。

お互いを大事に思いあう親子のつながりを切ってしまう部落差別を、私は絶対になくさなければならぬと強く思いました。

記者からの手紙

そんな私の思いを手紙に書き、新聞社に送ったところ、後日、次のような返信が記者の方から届きました。

連載第1回の紙面が読者に届けられた日、母とのやりとりを書いた原稿は締め切りの10行が空欄のままでした。同和地区に生まれた記者として、記事を通じてどんなメッセージを伝えるべきか、悩んでいたからで

当事者の生の声が包み隠さず語られていて、貴重なことを知ることができたね。

「寝た子を起こすな」的な考えでは、同和問題の解決にはならないよね。

無知では何も変わらないから、正しいことを知る機会が必要と感じたよ。



自分ひとりではなく、みんなで考えることで、お互いがこの社会の中でどのような立場にあるかを考えさせられると思います。

当事者が勇気を出して声を上げたり、本心ではない言葉を使ったりする必要のない社会をつくっていくために、私は今回の新聞記事から学び、感じたことを、周りの人たちに伝えていきたいと考えています。

ありのままを認め合うことのできる人権の新しい時代……。

そんな時代をつくっていくのは他の誰でもない、わたしたちみんななのだから。

福岡きぼう中学校と識字学級

2022（令和4）年、福岡市に、「福岡市立福岡きぼう中学校」が開校しました。九州初の公立夜間中学校です。この学校は、義務教育未修了の人、不登校や病気、家庭背景などにより、十分学校に通えず、学べなかった人、外国籍で就労している人など、年齢や国籍を超えた学び直しの場として設置されたものです。

学校教育を受け、文字を読み書きできることが当たり前のように感じ生活してきた私は、学びを保障されなかった人々の思いを現実として捉えきれませんでした。

そのような私の認識を変えたのが、教員になって出会った識字学級です。

私に関わる識字学級は、今から60年前、部落差別による貧困やいじめにより、学校に行きたくても行けなかった人々が文字の読み書きができるようになりたいとの切実な思いを集めて、自主的に立ち上げられました。

「こんばんは。識字です」の挨拶から始まる識字学級は、教育や啓発を担う教員や行政職員などが学級生の家庭を訪問し、文字の練習や資料をもとにして共に学習を行う

よしこさんは、うなずきながら話を聞いた後、真剣なまなざしで私をみつめながら、

「子どもたちに正しい知識や人を大切に思う思いやりが身につく教育をしっかりと願います。子どもたちが学んだことを大人に伝えることで、差別のないみんなが安心して暮らすことができる世の中になると思います」

と、凜とした声でおっしゃいました。

私は、この言葉を聞いた時、教育の大切さを再認識しました。そして子どもたちとしっかり向き合うために、私自身が人間としての生き方を問い直し、学び続けていくことが大事だということを変更して感じました。

識字の灯をともし続ける原動力

いつも和やかな様子のよしこさんですが、こつもおっしゃいます。

「識字学級に参加したはじめの頃は、先生（識字担当者）が訪問してこられた時に、どきどきして、すぐにはドアを開けられなかった」と。

忙しい一日を終え、疲れが溜まった後に始まる識字学級で、よく知らない相手を家に招き入れ文字を学び直すことには、きつさはもちろん、さまざまな葛藤があったことが

形で行われています。

学級生の思いにふれて

私が担当する学級生のよしこさん（仮名）は、子ども会への関わりを機に、部落差別をはじめとするあらゆる差別をなくす運動を40年以上進めてこられました。最初にお会いしたときから、穏やかな笑顔で私たち担当者をあたたかく迎えてくださいます。

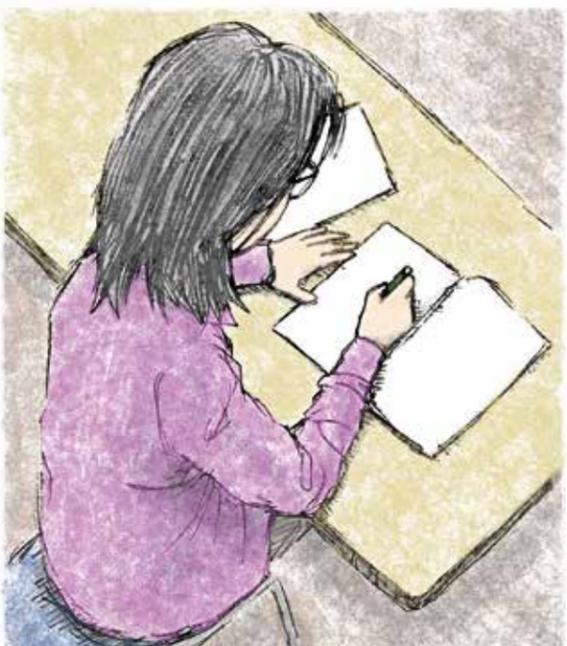
ある日、小学校で学習した『一枚のはがき』という題材についてよしこさんに話をしました。よしこさんと同じように識字学級で文字の練習をし、ようやく一枚のはがきを書き終えたおばあちゃんの話を取り扱った学習内容です。その時、次のような授業後の子どもたちの感想も伝えました。

- 何度も書いては消すことをくりかえしながら文字を練習するおばあさんの姿から、部落差別を乗り越え、文字を取り戻そうとする思いを強く感じました。
- 差別は、人生のとても大切なものを奪うことが分かりました。
- みんなが、安心してくらせるよう、差別やいじめをなくしていきたいです。

想像できます。その葛藤を乗り越えることができたのは、ともに差別をなくす仲間として担当者を信じ、受け入れ続けたからだと思います。

先のきぼう中学校は「教育を受けられなかった方々の心の中にきぼうの明かりとなるように」との思いがこめられています。

識字もまた「きぼうの明かり」を求めて60年間ともされ続けているのです。



「ただいま」
「お帰り」

今日も元気に娘の詩織が高校から帰ってきました。

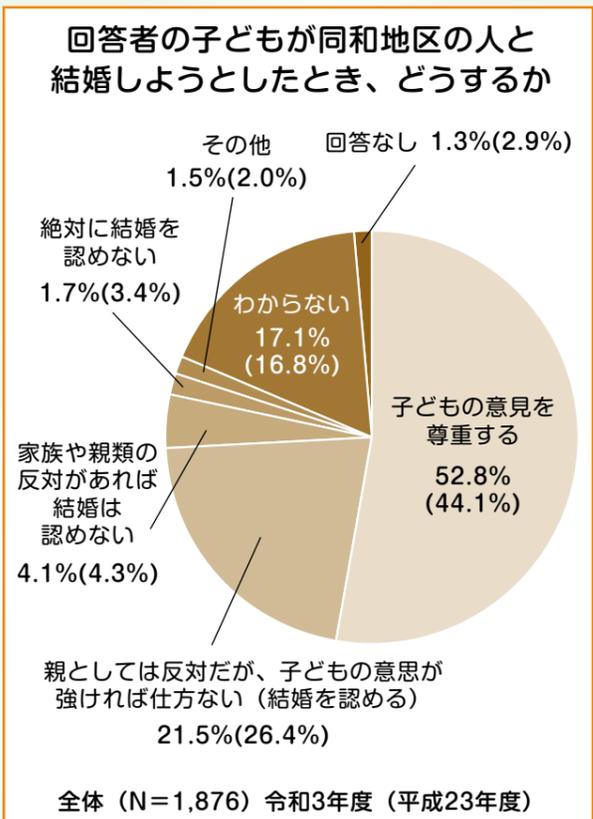
「お母さん、今日、学校で人権学習があったよ」

「へえー、高校でも人権学習ってあるんだ。何についての学習だったの？」

「結婚差別だよ」

「えっ、結婚差別」

「そうだよ。このグラフ見てよ」



令和3年度福岡県
「人権問題に関する県民意識調査」

「子どもの意思を尊重するが52・8%しかないんだよ。日本の憲法では、『結婚は両性の合意に基づく』ってなっているのに、どうしてなの。お母さんどう思う」
「部落差別は、今もあるんだね。昔の話って思ってた」
「昔の話じゃないよ。今の話」
「だって、お母さん、自分に関係ないと思っていたら」
「関係ない。それでいいのかっていうことを今日みんな考えてんだ」
「みんな、どんな考えを言ったの」
「いろんな考えが出されたけど、一番多かったのは、自分のことを信じてほしいっていうこと」
「信じてほしい？」
「そうだよ。私が好きになった人。私が選んだ人。だから、私を信じてほしい。選んだ人を見てほしい」
「でも、結婚は二人だけの問題じゃない面もあるから・・・」
「それ、どういうこと？お母さんも『どんな人』じゃなくて『どこの人』って聞くの」
「それは、まだ先の話でわからない。心配なのよ」
「私のことを、心配してるの。それとも、私が同和地区の人と結婚したら、お母さんも差別されるかもしれないって思っているの」

「そうじゃないけど、いろいろと・・・」

「同和問題について、私もまだ詳しく知らないけど、お母さんもよく知らないよね。自分には関係ないと思って、無関心になり、本当の姿を知ろうとしないこと。それが、同和問題が今まで残っている大きな原因の一つだって先生も言ってたよ」

「そう言われると、今まで同和問題について考えたことがなかった気がする」

「私、17歳だよ。あと一年で大人だよ。結婚したいっていう人を連れてくるかもしれないよ。私ね、この家に生まれてよかったと思ってる。これまで、大切に育てられたと思ってる。だから、私と私が選んだ人を信じてほしいの」

「そうね。もう少し時間はあるよね。これから、お母さんも関心をもってみる」

「ありがとう。これからも、いっぱい話そう」



「同和問題って昔のことでしょう」
「私には関係ないことだから」
「気にしてないから」
「差別があるなら、引越せばいいじゃん」
「こんな声が聞こえる」
「その一言一言に心を痛める人がいる声をあげると」
「そんなことぐらいで大ききな。悪気はないのに」
「という声が聞こえる」

私であることに胸をはり
私のふるさとを名のり
私の父や母を誇り
自分が自分であることを語り
それぞれがそれぞれを認め合う

どこで生まれていても、
どこで育っていても
差別を受けるために生まれた人は一人もいない
見つめてみよう 自分を
今、できることを



お母さん、大丈夫だったよ！

山田ふみさん（仮名）は同和地区に生まれ、介護士として長い間地域の高齢者に関わってきた人です。ふみさんとは古くからの知り合いで、いろいろなことを話してくれました。

突然の別れ

私は、20代の頃、福岡市内の自動車販売店に勤めていました。そこで同じ職場の人を好きになり、お付き合いを始めました。

お互いが行き来し、楽しい日々を過ごしていたある日、彼が住んでいた町に行きました。その時、

「このあたりには恐ろしい所がある」

と言われました。父が家庭も振り返られないほど部落解放運動の先頭に立って活動していたので、その言葉の意味は直ぐに分かりました。しかし、その時は何も言えませんでした。それから不安を抱えながらもお付き合いをしていました。

ある時、どうして知ったか分かりませんが、私が同和地区出身という理由で、

「つき合いも、結婚もやめよう」

夕方になって、

「お母さん、大丈夫だったよ」「向こうのお父さんからも仲良くしてがんばれと言われたよ」

と連絡があると、ヘタヘタと腰が抜け座り込むような気持ちになりました。それでもあまりに嬉しくなって高齢者に、「大丈夫だったよ」の返事を伝えると、「ワー」と大きな歓声が起こり、「よかったね、ふみちゃん」「私もうれしかあー」などの声と同時に拍手が湧き起こり、みんなの顔が笑顔になったことは忘れることができません。

わが子が成長するにつけ、いつ私と同じ経験をするか、不安と恐ろしさを胸にかかえ、ずっと過ごしてきた私もこの時ばかりは本当に安心しました。

今、息子は二人の子どもに恵まれ、連れ合いさんに支えられながら幸せに暮らしています。しかし、部落差別が今もある中で、私のように同和地区に生まれたという理由で結婚を拒まれている人や結婚することをためらっている若者がまだいることを、多くの人に知って欲しいです。そして、私が受けたつらい差別経験は、私だけで終わって欲しいと心から願っています。

と言われました。

私は、この先結婚もできないのかという思いになり、何でも奪っていく部落差別を憎み、親も恨みました。悲しみ之余り、生きていく気力さえもなくなってしまいました。しかし、懸命に差別をなくす運動をしている父親や夜遅くまで働いて生活を支えていた母親の姿を思い出すと、とても死ぬことはできませんでした。

息子が彼女の親に会って

それから25年ほどたって、私の息子にも好きな人ができていました。

ちょうど同和地区の高齢者の研修に行っていた時のことです。

その日は、息子が同和地区出身であることを話し、結婚したいことを彼女の親に話す日でした。親としても心配で心配でたまらない日でした。私は高齢者に

「今日、息子が彼女の親に会って、自分のことを話し、結婚の許しをもらおうよ」

と話しましたが、その時はみんなシーンとしていました。今考えると、研修に参加している多くが自分の差別経験と重なって何も言えなかったのです。

流した涙を無駄にしないために

ふみさんは、涙を浮かべながら、時には声を詰まらせながら自分が受けた結婚差別のことを話してくれました。そのことは、誰にも話したくないことだったと思います。しかし、私を信じて「差別の苛酷さを知って欲しい、部落差別をなくしてほしい」という一念で、勇気を振り絞って話してくれたと思います。

話を聞いていく中で、私も体が震えてくるような気がしました。同時に、二世代三世代にわたってふみさん達に覆いかぶさってくる部落差別を現存させているのは、私たち自身であることに気づかされました。

ふみさんに流させた涙を無駄にしないために、私は多くの人に「部落差別は許されないことであり、明確な人権侵害であること」を伝え、一人ひとりの人権が大切にされる筑紫野市をみんなですくっていききたいと心から思っています。





電通：人権ポスター2020年度作品

社会を変えるには時間がかかるけど、
自分を変えるのに時間はかからない。

根拠のない誹謗中傷のあふれるインターネットの世界で、このポスターを目にした時、うれしいような、勇気づけられたような、あたたかい気持ちになりました。

部落差別のあるこの社会は簡単には変わらないけれど、自分を変えることができる。

自分が変わることによって、ドミノ倒しのように続く差別の連鎖を止め、部落差別のない社会に変えていくというメッセージが伝わってきます。

あたたかい気持ちを広げる力に

インターネット利用が当たり前の時代になり、私たちの生活は、ひと昔前では考えられないほど便利になりました。

その一方で、情報発信が簡単にできるようになったことから、さまざまな情報があふれ、差別的な言葉やネガティブな情報を目にすることもあります。

差別の伝言ゲーム、
私たちでもう終了です。

「部落差別」を「差別の伝言ゲーム」と言い換えて、それを自分たちが終わらせるのだ、という強い意志をこのポスターから感じました。

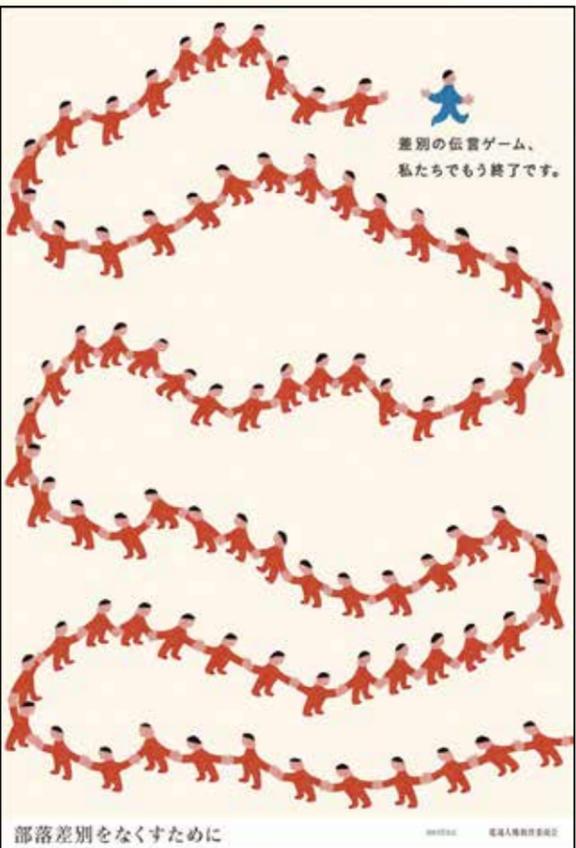
インターネットには、「伝言ゲーム」のように差別を社会にばらまいてしまう恐ろしさがあるからです。

私たちにできること

部落差別をなくすために、日々、インターネットを使う私たちに、何ができるでしょうか？

筑紫野市の「人権尊重のまちづくりスローガン」にそのヒントがあるように思います。

自分が人からされたり、
言われたりして、いやなことは
自分は人にしない、言わない



電通：人権ポスター2018年度作品

しかし、このポスターのようにあたたかい言葉やポジティブな情報を広げることができません。インターネットを使う者の知恵と勇気で、あたたかい気持ちを広げる力にしていききたいものです。

差別の伝言ゲーム

ポスターには、次のようなものもありました。

解放への一步 (第49集) アンケート用紙

(当てはまるものに○をつけて下さい。)

①解放への一步第49集の内容は・・・

- よかった
- まあよかった
- あまりよくなかった
- よくなかった

②心に残った内容は…(複数回答可)

- 「巻頭詩」
- 「水平社博物館に行ってみた」
- 「みんなでつくる『人権の新しい時代』」
- 「ともし続けて60年、識字の灯」
- 「今、できることを」
- 「お母さん、大丈夫だったよ！」
- 「インターネットと部落差別」

③感想をお聞かせ下さい。

解放への一步(第49集)アンケートのお願い

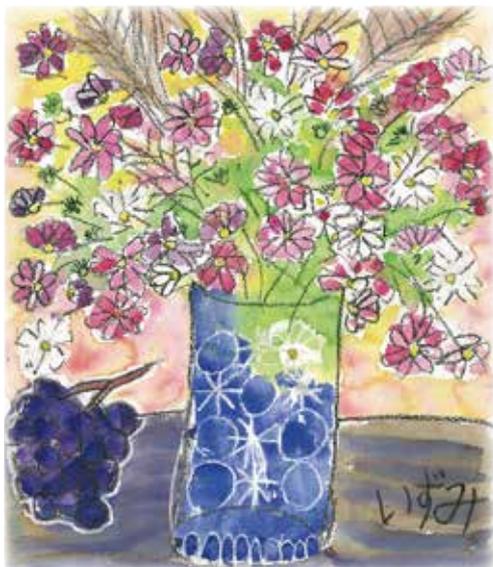
筑紫野市は、今年市制50周年を迎えました。啓発冊子「解放への一步」の発行は、市政開始とほぼ時を同じくして、今年で49年になります。国民的課題といわれる同和問題の解決に役立てていただくために、本年度も各世帯に配布いたします。つきましては、市民の皆様から読まれた感想等をいただき、今後の参考にさせていただきたいと考えています。趣旨をご理解のうえご協力のほどよろしくお願いいたします。

※アンケート回答の方法

- ①FAX: 上のアンケート用紙に記入のうえ以下の番号にFAX下さい。
→FAX番号: (092)923-9644
- ②郵送: 上のアンケート用紙に記入のうえ以下の住所にご送付下さい。
→〒818-8686 筑紫野市石崎1丁目1番1号 筑紫野市役所教育政策課 行
- ③メール: k-kyoumu@city.chikushino.fukuoka.jp
- ④市ホームページのアンケートページ [筑紫野市 解放への一步 検索](#)



携帯電話・スマートフォン等で読み取るとアンケートページにつながります。



2022年11月1日発行 解放への一步 第49集

■編集発行

筑紫野市

筑紫野市教育委員会

筑紫野市同和教育研究会

筑紫野市同和问题啓発資料編集委員会

■問い合わせ先

筑紫野市教育委員会教育政策課

TEL: (092) 923-1111 (内線714、715)

■印刷 久野印刷株式会社